

MAキック
マッハ士道館3 四大タイトルマッチ
1月24日●東京・後楽園ホール

開志がないわけではなかつた。練習も十分。仕上がりはけつして悪くなかった。だからこそ万全を期してのリングインのはずだった。それなのに試合開始のゴングが鳴ると、時間はいたずらに過ぎていくばかり。人間機関車と評される佐藤の、フックを中心とした怒濤のラッシュも不発。挑戦者の声

井上も果敢に得意のヒジ打ちを狙つたが、決定打を打つまでには至らなかつた。ふたりとも前には出でているが、何かが噛み合わない。

達成感のない王座防衛。新春第一戦のメインを張る者にとって、これほど辛いものはない。いったい何が悪かったのか？

その理由を「佐藤はいつも硬いから」と分析したのは、士道館の添野義三館長だ。「まだ力を抜くところと入れるところがわかつてないんだよねえ。」

格闘技というものは難しいもので、常に100%の力を出し続けたからといって、必ずしもいい結果を残せるものではない。その間に力を抜く部分がなければ、ガチガチの動きになつてしまふ。タイ人がいい例だ。普段は全身

に無駄な力を一切入れることなくフニャうとしているが、いざ攻撃する段になると、パンチやキックがヒットするインパクトの瞬間にもつとも衝撃が加わるように程よい力を加えてくる。佐藤の動きがガチガチだつたとは思わない。だが必要以上の力が加わっていたのは疑いようもない事実だ。ライト級王者としてのプレッシャーがそうさせてしまったのだろうか。

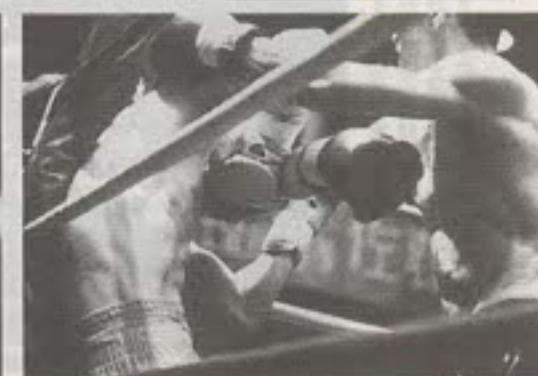
それでも井上のヒジ対策は万全だったのでは、と筆者が尋ねると、佐藤は「いや、（くると）わかつているものをもらつていてるようじや、本当にどうしようもないですよ。ヒジはもらわないので当たり前です」と答える。士道館の関係者でも、佐藤のことを悪くいう人はいない。それほど真面目に練習に打ち込むタイプであるからだ。

だからこそ佐藤は今回の不完全燃焼の責任をすべて自分で背負い込んでしまつた。しかも昨年11月の村浜武洋戦に続く悔いの残る試合。控室へ戻ると、「自分なりに頑張つたつもりなんですけど、こういう試合が続いてしまうと、もう無理かなという気持ちになつてしまますね」とうなだれた。「また頑張らなければならないんだろうけど、どうも結果が出ない。誤算？」

「こういう試合が続くと、これまで多少なりとも培われてきた自信が崩れてしまう。納得のいかない練習が続いたとか、そういうのだったらわかりますけど、今回は練習も積んだし、体重もベストのライト級。（士道館の）ほかのみんなは、後輩のみんなは結果を出しているのに、自分だけ、先輩である自分がいちばん……。」

そこまで喋ると、佐藤は号泣した。努力しているのに結果が出せない男に、かける言葉はみつからない。人間機関車の目にも涙。プレッシャーからの呪縛の处方薬にと添野館長は「外国人に連れて行って、もっと修羅場をくぐらせるしかない」という計画をぶちました。こんなところで機関車が止まつてはいけない。

(布施)



○「俺が考つるのは生意氣でけど」と前置きしながら、
佐藤（孝也）さんは、いまの俺や佐藤さんだった大刀打ちではない（かし）MAのライト級はもっと頑張らないといふことは、かけた。井上は3月14日の次回戦にも出場する予定だ



●MA日本ライト級タイトルマッチ
(第12試合) メイン・イベント
(前回王者)
△佐藤堅一
(5R判定ドロー) 8回点=50-50-49-49-49-49
△井上哲
(山木ジム所属、66・2・30歳)
(元最優秀選手)
●佐藤が防衛に成功。

○両者とも行くところは行く。しかしふたつの開志がガツチリとかみ合う攻防は生まれなかつた。
○右ローによる攻撃が目立つた佐藤。セコンドは上下に散らしてのコンビネーション攻撃を指示していたが…



●コーナーに追い詰められてのヒジは二見の通り、グローブでカットした佐藤。「俺が下手だったのか一番の理由。それと俺がもっと根性を出さなかったのが悪い」(井上)

●井上といえば、ヒジ。そのくらいヒジで有名な選手。佐藤の防御もうまかったが、組みここうとするスキをうかがってヒットさせる場面も